

投稿

ビルマの星座絵 ～西山峰雄氏の研究による～

臼井 正（京都学園大学）

1. はじめに

ビルマ（ミャンマー）と言われて思い浮かべるものと言えば、アウンサン・スー・チーさんと『ビルマの豎琴』くらいで、「ビルマの星座絵」と聞いてイメージが思い浮かぶ人は、多分いないでしょう。これを読んでいるあなたも、きっと「何それ？ なぜビルマ？」と思ったことでしょう。しかしビルマは、独自の星座を描いた絵が沢山残っている、世界でも稀な星座絵の宝庫なのです。

2. きっかけ

「ビルマは星座絵の宝庫」などと知ったかぶって書きましたが、これまでの経緯を考える

と、僕も偉そうなことを言える立場ではありません。それは、NPO法人・世界遺産ネットワークの一員として、2003年夏に東南アジアへ公式訪問をしたことに始まります。この訪問は天文ネタとは全く関係なかったのですが、ミャンマー中部の町、アマラプラのチャウトージー・パゴダの天井に、全く見たことのない星座絵を見つけて、そこにゾウや孔雀から、何の形か分からない絵まで描かれているのに遭遇して、大変驚きました（図1）。パゴダとは仏舎利（お釈迦さまの骨）を納めた仏塔のことです。

なぜそれほど驚いたかという、このように全天の星に星座を設定して、それを1枚の

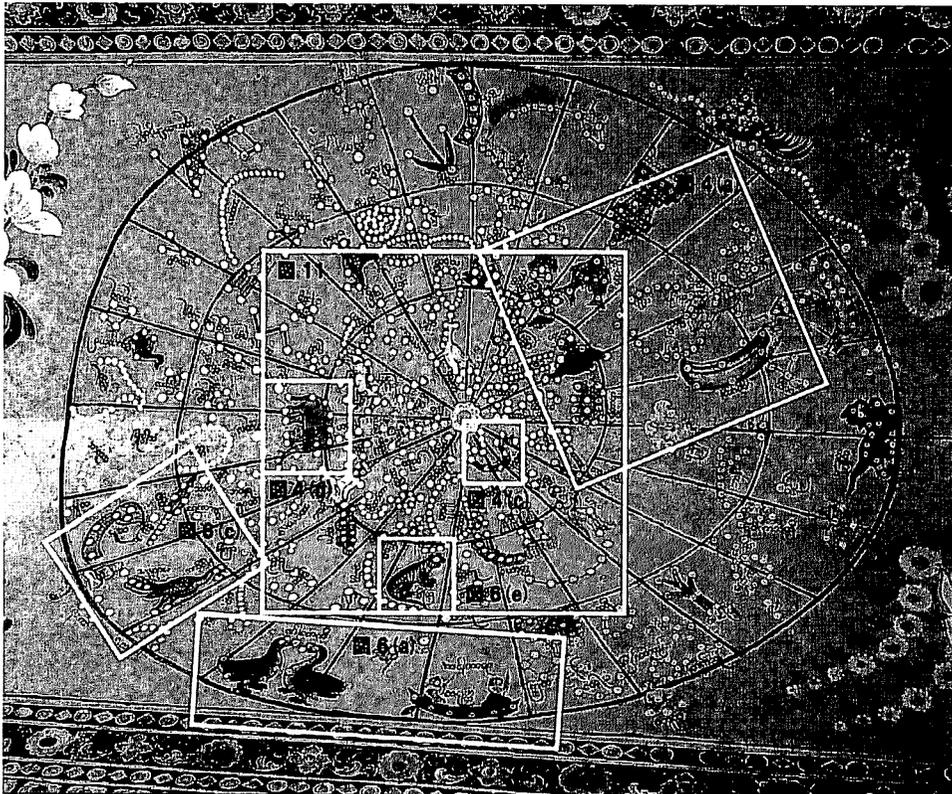


図1 チャウトージー・パゴダの星座絵（A図）。白抜きのはしは図4、図6、図11の部分図に対応。

図にまとめた文化の例を、それまで3つしか知らなかったからです。

- 1) メソポタミアーギリシアー西洋ー現在
- 2) エジプト (デンデラ神殿:ただし、メソポタミアーギリシア系の星座も含まれる)
- 3) 中国

もちろん、それぞれの民族は固有の星の名や星座名を持っています。ただ、それはオリオン、すばる、北斗七星など目立つ星に限られ、全天の星ではありません。古代ギリシアでも、紀元前8世紀の詩人ホメロスの作品に出てくる星座名は、オリオン、シリウス、プレアデスの他、全部で10個程度に過ぎません。現在まで伝わる、おひつじ座、おうし座などの黄道12星座は、古代メソポタミアに始まり、それがギリシアに伝わったものです。

日本の古典の中に見える星の和名も、すばる、彦星、タづつ(宵の明星)程度で、あとは全て中国の星座を輸入しました。例えば、高松塚古墳やキトラ古墳の星図も、中国が起源です。全天に星座を設定するというのは、ある程度文明が進んでから、暦の作成や、太陽・月・惑星の観測と位置計算ともなって行われ、それらがセットになって周辺に伝わる、というのが基本的なパターンです。ところが今、このリストに

- 4) ビルマ (ミャンマー)

が加わったのです。

旅行中は、天文ファンでこの星座絵を見たのは、僕が初めてではないかと思っていたのですが、帰国後、念のためインターネットで調べると、西山峰雄氏による詳細な研究があることが分かって、また驚きました。

その後、西山氏と連絡を取り合い、直接お会いしてお話を伺ったり、資料を見せたりして頂きましたが、ビルマには僕が見た以外にも多数の星座絵があるとのことでした。西山氏は横浜市在住のアマチュア天文家で、小惑星6745番Nishiyamaは同氏の名前にちなん

で命名されました。実際にお会いすると、80才を超えているのが信じられないほど、お元気でパワフルな方でした(図2の右端が、ビルマの占星術師に占ってもらった西山氏)。西山氏は1989年に旅行でビルマの首都ヤンゴン(ラングーン)に行った時に、黄道帯に西洋とビルマの27星宿が描かれた星図(1972年のラングーン工科大学卒業論文「西洋の星座とビルマの星座の比較研究」)を入手し、帰国して大野徹氏(大阪外国語大学教授)の著書「ビルマの仏塔」[1]に掲載されているアマプラの星座絵を見てこの図を研究したいと思ったのがきっかけだそうです。そして、1991年には『星の手帖』に「ビルマの星座」[2]を発表しています。その後も1992年、1996年にビルマを訪れ、各地で星座絵の採集、ビルマ語の翻訳などの研究を続け、その研究は海外の文献[3]でも引用されています。



図2 西山峰雄氏(右)とビルマの占星術師

現地調査で星座に詳しい人を紹介されても、軍事政権下で外国人との接触は嫌われていたので連絡がとれずに終わったり、翻訳といっても、現代の日本人が古文書の草書を読めないのと同じように、昔のビルマ文字を読める人は少なかったりと、苦勞されたそうです。ビルマ語は、子音の数は33個ですが、母音、複合母音および母音記号の数は50個以上で、日本語はもちろんローマ字でも表しにくい文字が多く、それを直しながらビルマ、パーリ、

サンスクリットの辞書を引いていったのだそうです。

ここでは、西山氏が大野徹教授、高橋ゆり先生、大橋由紀夫先生をはじめとする方々の協力で行った研究に沿って、ほとんど知られていないビルマの星座の紹介をしていきます。なお、ビルマの現在の国名はミャンマーですが、両者は同じ語源で、現在も民族、言語を指す場合は、ビルマ族、ビルマ語という表現が使われています（ただし、人口の30%は、少数民族などが占めています）。ここでは、「ビルマ」を用いることにします。

3. ビルマの星座案内

筆者が星座絵を見たチャウトジー・パゴダは、ビルマ第2の都市マンダレーの南10kmに位置するアマラプラにあります（図15参照）。アマラプラは、1757年に成立してタイのチェンマイやアユタヤまで攻略したコンパウン朝（アラウンパヤー朝）によって1783～1823年、1838～1856年の2回ビルマの首都になりました。この遷都も占星術によって行われたと記されていますが、その東郊のタウンダマン村にバージード王が1846年に建てたのがチャウトジー・パゴダで、星座絵もこの時に描かれました。チャウトジーは大理石という意味で、本尊が大理石で出来ていることから名づけられました。王様作ったパゴダですから、全てに大きく頑丈、豪華美麗です。当時は、イギリスの進出に苦しめられていた時期ですが、星座絵には西洋の影響は全く見られません。星が丸で、明るさによらずほぼ同じ大きさなのも、ビルマを含めた東洋一般の描き方です。星座絵は、参道入り口のアーチ型の天井（図3）に描かれています。図1の左側のだ円が少し変形しているのは、開口部に向けて天井が少しV字型になっているためです。このパゴダには3枚の星座絵が描かれていますが、筆者も見ても一番詳しいA

図（図1）を中心にビルマの星座について具体的に紹介していきます。

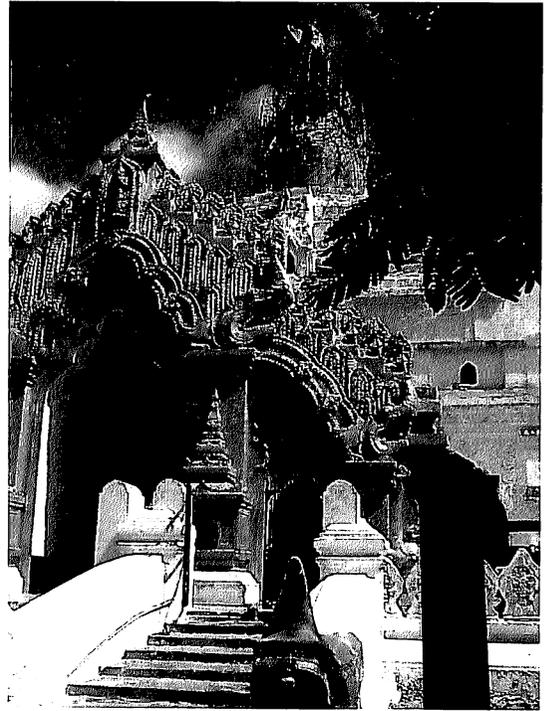


図3 チャウトジー・パゴダの入り口

まず図4(a)の中央下の亀は、オリオン座です。オリオン座の主要な星に加えて、小三つ星も描かれています。ただし三ツ星は本当は右肩上がり配列です。亀の下は「鉄釘」で、うさぎ座に当たります。亀の右上にある2匹の魚はヒアデス、その更に上の6個の星は6匹の雛をあらわし、すばるに当たります。亀の上の黒い鳥は、伝説上の鳥ヒンダ（天竺鴛鴦）でぎょしゃ座、その左の蟹は、おおぐま座からやまねこ座にかけての星に相当すると思われる。

亀の左は船首で、上の2星はふたご座のカストル・ポルックス、中の2星はこいぬ座、下の2星はシリウスとその隣の星（おおいぬ座ベータ）で、おおいぬ座の下半身は別の星座になっています。現代ビルマの文学者ミン・トゥ・ウンさんの天文啓蒙書『天上の星

ひとつ』では、ポルックスが「舟のへさき」、こいぬ座のプロキオンが「舟のへそ」、シリウスが「舟のとも（船尾）」となっています。これでは舟が立ってしましますが、実はこれらの星が東の地平線から昇る時の姿ではないかと考えています。「やまねこランド」の「ほしはすばる」[4]を使って、ビルマの1月1日午後8時すぎの東の空を再現すると（図5）、これらの星々がちゃんと横になって、舟の姿に見えます（日本ではビルマよりも緯度が高いので、ふたご座（舟のへさき）が早く昇り、バランスが悪くなります）。古代エジプトのシリウスと同じように、東の空に舟が現れるのを季節の目安としたのではないかと想像がふくらみます。

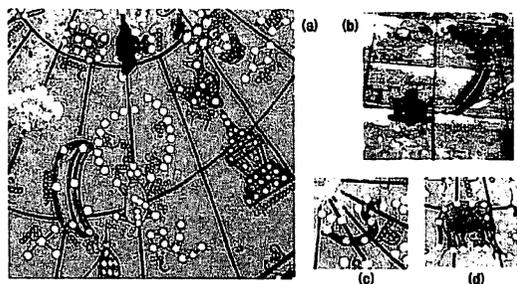


図4 ビルマの星座絵(1)



図5 ビルマの1月1日午後8時すぎの東の空
（やまねこランドのほしはすばるによる）

星座絵はチャウトージー・パゴダだけでなく、6章で紹介するようにその他多数描かれています。その中の一つマハムニ・パゴダの絵（図4(b)）でも、やはり亀と舟（ただし、左右逆）が描かれています。図4(c)の竜（又は、へび）は北斗七星ですが、ひしゃくの形は、実際の配列の鏡像になっています。また、図4(d)のゾウははくちょう座ですが、ゾウの輪郭に沿って星が並んでいるだけで、実際の星の配列には対応していません。これは実際に絵を描く人に、あまり星座の知識が無かったためだと思われます。

次に、図6(a)の左の二匹の雛は、ケンタウルス座のアルファ星とベータ星、右の船に乗る漁師は、みなみじゅうじ座ですが、やはり実際の星の配列には対応していません。図6(b)はマハムニ・パゴダの星座絵で、右の人は網を引いています。また、南十字の+型の星の配列は、あまり船と漁師には見えません。ところが、ビルマの緯度・北緯20度では、みなみじゅうじ座は地平線から10度くらいしか上がらず、日周運動とともに、南十字の+が褶をこぐように動きます。そこで、地平線すれすれの星々を、船と漁師に見立てたのかも知れません。再び、「ほしはすばる」で、ビルマの6月1日午後9時の南の空を再現しました（図7）。星座線が引いてあるのは、上からうしかい座、おとめ座、ケンタウルス座、みなみじゅうじ座で、みなみじゅうじ座の左の明るい2つの星が、二匹の雛に当たるケンタウルス座のアルファ星とベータ星です。

ここまで挙げた星座はどの星座絵でも共通ですが、同じ星々に対して異なった絵が描かれているものもあります。さそり座は、今まで紹介した星座絵（A図）では、図6(c)のように孔雀と人物（アンタレス）、尻尾に分割されていますが、同じパゴダの別の絵（B図；全体図は図8）では、図6(d)のように一匹の竜（又はへび）になっています。その上の傘は、へ

びつかい座の足に当たると思われます。また、おとめ座のスピカは、A図では図6(e)のように虎ですが、B図では図6(f)のように手のひらになっています。

チャウトージー・パゴダA図には、合わせて160の星座名・星名と47の星座絵が描かれていて、西山氏による一覧表をもとにしたクリッカブルマップ[5]を筆者のホームページで公開しています。

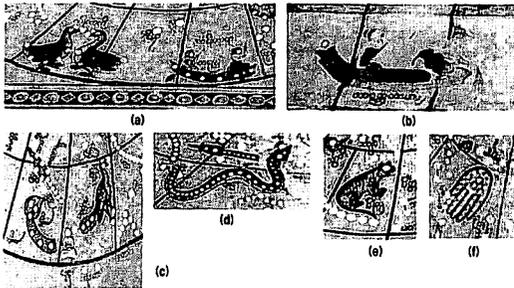


図6 ビルマの星座絵(2)

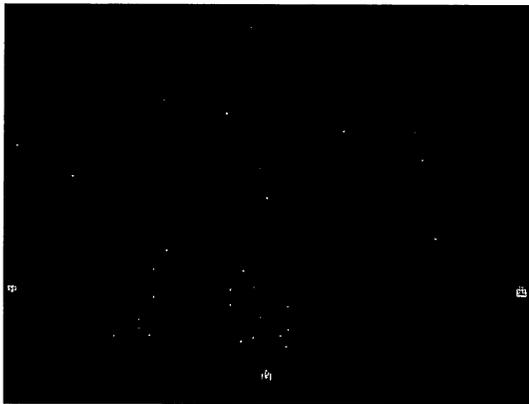


図7 ビルマの6月1日午後9時の南の空（やまねこランドのほしはすばるによる）

4. チャウトージー・パゴダの星座

チャウトージー・パゴダで筆者が見たのはA図だけだったのですが、西山氏は、このパゴダで他にB図（図8）、C図（図9）の2つの星座絵も見ています。B図は、A図と同じく同心円状の星座絵で天球の経緯線が引かれていて、36の名前と46の星座絵がありますが、先

ほど紹介したように、さそり座やおとめ座などで絵に違いがあります。又、A図と比べて星座全体が楕円の短軸に対して30度ほど回転しています。一方、C図は経緯線が無く、天の赤道又は黄道を中心線とした円筒図法で描かれていて、39の単語と32の星座絵があります（図の右方には白いものが塗られています）。右方には舟、中央下にはさそり座に当たる孔雀+人物+尻尾、左上には逆さになったゾウ（はくちょう座）や馬（ケフェウス座）などが見えます。

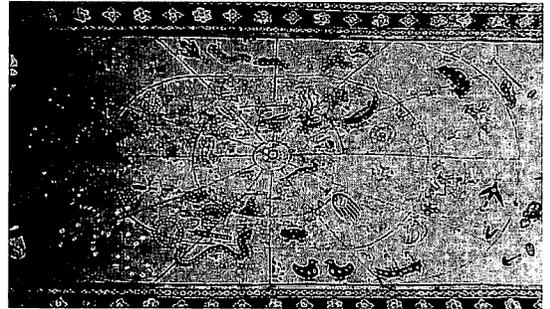


図8 チャウトージー・パゴダB図



図9 チャウトージー・パゴダC図

これらの星座絵、単語のうち、西山氏によって比定されたのは星座の数が約40、単語は1/4くらいです。個々の星座名は、インドの27星宿名（次章参照）の他は、インドのヴェーダ神話の神々の持ち物、法螺貝、三叉戟、蓮華、虎の皮、神々の乗り物の動物が目につきます。その他、智慧、死生、色（色即是空の色）といった抽象的な名前もあります。

又、A図には木星と金星の名が、それぞれ赤経16時10分、15時45分に書き込まれています。各時点の分点で視位置を出すと1841、

1853、1865年のいずれの会合か判定が難しいのですが、春分点の移動を考慮しない Nirayana 式の推算によると 1853 年 10 月 28 日になることが齊藤国治、矢野道雄両先生により判明し、これは着工年 1846 年とほぼ一致します。もしそうだとすると、描かれた内容から星座絵の年代決定ができたのはビルマで初めてだろうとのこと。ただし、あるいは単に木星、金星という星座なのかも知れません。

『ビルマ国語辞典』によるとビルマの星座は 9 主要星座（次章参照）、黄道 12 星座、インドの 27 星宿の他に 94 個の一般星座があると書いていますが、その名前や位置は現在分かっていません。また、パウンデー・ポンチーさんの『星の見方と物語』には、「古代ビルマの天文学者は、天空の星を形によって 158 のグループに編成して子々孫々に残した。しかし現代では端数の 58 ですら正確に指し示す人はいない」と書いてあることから、西山氏は、この星座絵はこれらを全部描いたものだと考えています。

語源的にはインドの星宿名が 20%、パーリ語系が 50%、ビルマ語系が 10%、残りは系統不明とのこと。パーリ語は、サンスクリットと同じ系統のインドの言葉で、上座部仏教（小乗仏教）の経典はこの言葉で記されています。一般の星座名にビルマ綴りが少ないことから大半はインドからの借用語かと思われるが、インドでの固有の星座は 27 星宿のみで、それ以外はギリシア由来の星座を用いています。ビルマ以外の国で同様な星座が見つかっていない現時点では、パーリ語が分かるビルマの僧侶兼占星術師がビルマ独自の星座を設定したと考えるのが、一番自然でしょう。

5. ビルマの 9 大星座・黄道 12 星座・インドの星宿

ビルマには、純粋なビルマ語の名をもつ独自の 9 大星座の体系があります。それは、図 10（チョウアウンサンター・パゴダ）の内側の円にも描かれています。時計の 8 時の方向のからすから、反時計回りにヒンダ（天竺鴛鴦とも呼ばれるビルマの伝説上の鳥）、蟹と続きます。ただし、この絵では鷲と象が入れ替わり、髪飾りは円の中心に人物として描かれています。蟹と天秤は、西洋の黄道 12 星座と共通の名前ですが、別の星々に設定されています。

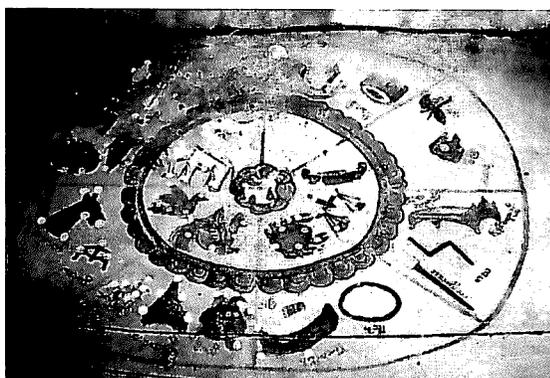


図 10 チョウアウンサンター・パゴダの 9 大星座（内側）とインドの星宿（外側）

表 1 ビルマの 9 大星座

ローマ字	ビルマ名	対応する星座名
Byain	鷲（さぎ）	カシオペア座
Kyi	からす	ペルセウス座
Hamsa	ヒンダ（天竺鴛鴦）	ぎょしゃ座
Pazun	蟹	おおぐま座の胴体 やまねこ座？
Chain	天秤	おおぐま座の足？
San Kyin	髪飾り	かみのけ座
Kaungta	漁師	ヘルクレス座
Hsin	象	はくちょう座
Myin	馬	ケフェウス座

チャウトージー・パゴダA図の中心付近に

も9大星座が見られます(図11)。ただし、上のチョウアウンサンター・パゴダ寺院とは反対回りです。この内、蟹はおおぐま座の胴体にあたるらしいのですが、どう見ると蟹になるのかは、よく分かりません。天秤は、おおぐま座の足の爪に当たると思われます。また、この図では、髪飾り(かみのけ座)だけ絵がありません。9大星座ではありませんが、天秤の右の猿はしし座の大鎌、その右上の2又の枝のような絵は、インドの星宿アーシュレーシャー(かに座からうみへび座の頭)です。

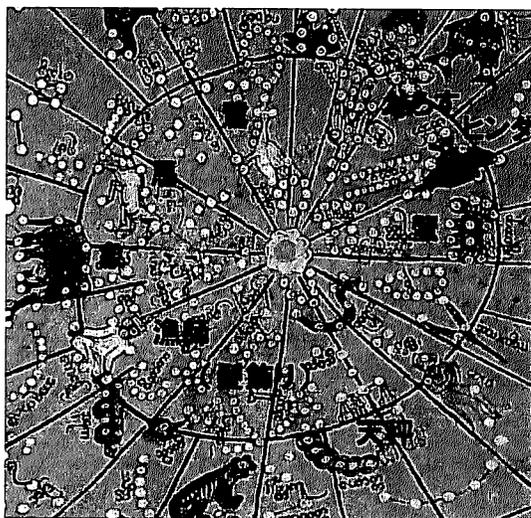


図11 9大星座(チャウトージーA図)

図12は、マハムニ・パゴダにある黄道12星座の絵ですが、私たちが見慣れている絵と少し違っています。例えばふたご座は双子ではありませんし、やぎ座は全身が魚で、みずがめ座には人物がなく、逆にてんびん座には人物が加わっています。これらは、ヘレニズム世界からインドへ伝わった黄道12星座がインドで変形して、それがビルマに伝わったものです。例えば、インドのやぎ座はインドのマカラという怪物で表されます。ビルマにおいて黄道12星座の名は、1476年タキン・トゥー一王女を相手に歌われた史謡の中に、金牛宮(おうし座)、巨蟹宮(かに座)、宝瓶宮(て

んびん座)、処女宮(おとめ座)などが出てきます。ちなみに、黄道12星座はインドから中国を経由して、平安時代の日本まで達しています。日本の城の天守閣に乗っているシャチホコも、インド版やぎ座にもなっているマカラがモデルだと言われています。

一方、インドには黄道12星座を受け入れる前から、インド固有の星座として赤道付近に設定された27(又は、28)の星座があり、星宿(ナクシャトラ)と呼ばれています(ナクシャトラについては[6]や[7]を参照)。これは、月が約27日で恒星の間を一周して元の位置に戻ることから設定されたもので、中国の二十八宿と同様の体系ですが、インドと中国の影響関係はよく分かっていません。



おとめ しし かに ふたご おうし おひつじ



うお みずがめ やぎ いて さそり てんびん

図12 黄道12星座(マハムニ・パゴダ)

このインドの星宿がビルマにも伝わり、それはチョウアウンサンター・パゴダ(図10)の外側にも描かれていて、アシュヴィニー(時計でいうと9時少し前の馬の頭)から反時計回りに、クリッティカー:すばる(7時半の6匹の雛)、アールドラー:オリオンの三つ星(6時過ぎの亀)などと続きます。しかし、インドでの星宿のシンボルは、すばる=カミソリ、三つ星=宝石などで、ビルマとは異なり、ビルマはインドの星宿の体系と名前は輸入したものの、シンボルは独自に考えたのだと推定されます。

6. ビルマ星座の源流

ビルマ族はもとは現在の中国・雲南地方に住んでいましたが、南下を始めて9世紀頃には現在の地に至り、そこで先住民族のモン族などから、仏教をはじめとするインドの文化を吸収していきました。ビルマ族が初めて建てた国バガンの12世紀の碑文には、12個の星座名で年を表したものが600件ほど見つっていますが、これはインドで作られた年の表示法がビルマに伝わったと考えられます。木星がほぼ12年で恒星の間を一周することから、インドの27星宿からほぼひとつおきに取り入れた12個の星宿名をあらかじめ決めて、その星宿名によって年を表すものです（中国にも、木星の位置による同様の年の表示法があります）。インドの3番の星宿ジャイスタがビルマではチッカに、4番のアサダーがアーパットに、7番のアスピナがアテンになっているほかは発音も同じです。しかし、バガン王国はモンゴルの侵攻で滅び、この年の表示法も途絶えます。このバガンの遺跡は、カンボジアのアンコール・ワット、インドネシアのボロブトゥールと並んで東南アジアの3大仏教遺跡に数えられています。図13はバガンのシュエサンドー・パゴダで、パゴダのテラスの端に座っている人の姿と比べると、その大きさが分かります。

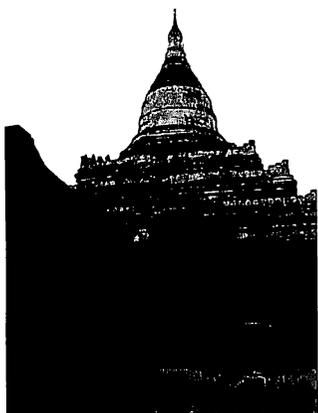


図13 シュエサンドー・パゴダ（バガン）

モンゴルが撤退した後も戦国時代が続きますが、15世紀頃の詩文や経文の中に、9大星座、黄道12星座、インドの星宿が出てくるので、1500年以前には、これらの体系が世に出ていることが分かります。しかし、一般の星座の記録はもっと新しく、1799年にイギリスのブキャナン船長が68個の星座を報告するまで待たなければなりません。そして、18世紀に成立したコンパウン朝のもとで、チャウトージー・パゴダをはじめとして多数の星座絵が描かれました。ブキャナン船長の報告とチャウトージー・パゴダの星座絵の西山氏による対比では、9大星座は9個全て、27星宿は22個、一般星座は7個だけが合致し、ブキャナン船長の残りの30星座は同定不能でした。両者は全く別系統の王朝占星術師によって描かれたように思われますが、この辺のビルマ王朝占星術師の歴史については全く史料を得ていません。

黄道12星座やインドの星宿はビルマの他、カンボジア・タイなどにも伝わっています。タイの12ヶ月の名前はインド由来のもですが、ビルマの月の名前は近隣と全く異なっていて、語源、意味ともにわかっていません。また、中国の十二支もタイ、カンボジア、ラオス、ベトナムには昔から入っていますが、ビルマには入っていないなど、東南アジアはインドと中国の両方の影響を受けて来ました。しかし、東南アジアの他の国では自分たちで新たな星座を作ることはしなかったようで、なぜビルマだけが独自の星座を設定したのか、謎は残っています。

7. ビルマ星座絵めぐり

ここからは、チャウトージー・パゴダ以外で、星座絵のあるビルマのパゴダや寺院を巡って行きます。所在地は図14、図15を参照ください。

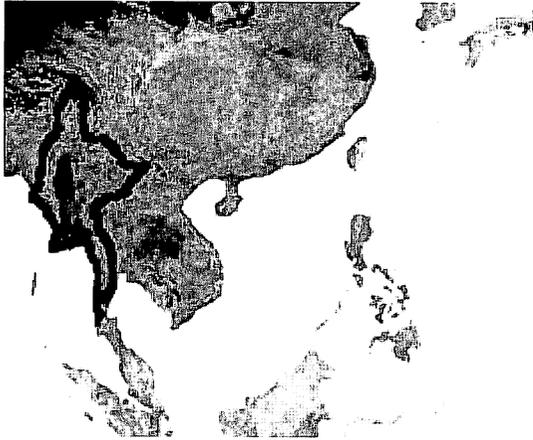


図14 東南アジアの地理 (NASAのthe Blue Marbleより 太枠がビルマ)

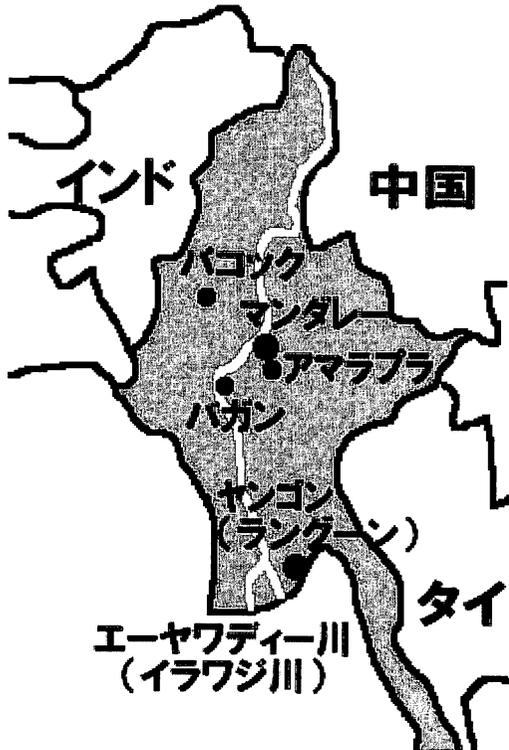


図15 ビルマの地図

チョウアウンサンター・パゴダ (アマラプラ)

これは、西山氏がチャウトジー・パゴダへ行く途中で道に迷った時に、偶然見つけたものです。パゴダ自体はあまり立派なもので

はなかった、とのことです。逆V字型の天井に向かい合わせに、ビルマの9大星座とインドの星宿の絵 (図10) と、黄道12星座の絵 (図16: 左のさそり座から時計回りに右のおうし座までが残っている) とが描かれています。このように、実際の星の配置を表した星図ではなくて、主要な星座のシンボルを円形に配置したパターンも多く見られます。

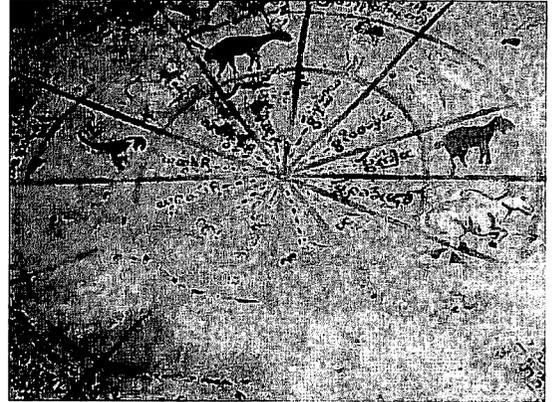


図16 チョウアウンサンター・パゴダ (アマラプラ) の黄道12星座

マハムニ・パゴダ (マンダレー)

ビルマ中部の大都市マンダレーは、京都のように町が碁盤目に区切られ、中心にはコンパウン朝の王宮があります。ただし、王宮は第二次大戦中に日本軍とイギリス・インド連合軍との交戦で焼失し、現在の建物はコンクリートによる再建です。このパゴダは筆者も訪れたのですが、星座絵は見逃してしまいました。

西山氏によると、星座絵はアーケードになっている西と南の参道途中の小さな空間が上に広がった空間部の天井と壁に合計84枚以上も描かれています。図17ではメインの参道が左右に走り、星座絵は手前と奥の逆V字型の天井の両面にあります。図18はその内のひとつで、一番下の段には9大星座の4つ、上には亀と船と猿 (ししの大鎌) の星座絵、その上の山車はインドの想像上の惑星ラーフ (月

の昇交点に当たる)、右下には太陽・月を含めた7惑星が、なぜかひしゃくの形に並べられています。図4(b)も、このマナムニ・パゴダの星座絵ですが、見比べると分かるように別の絵です。

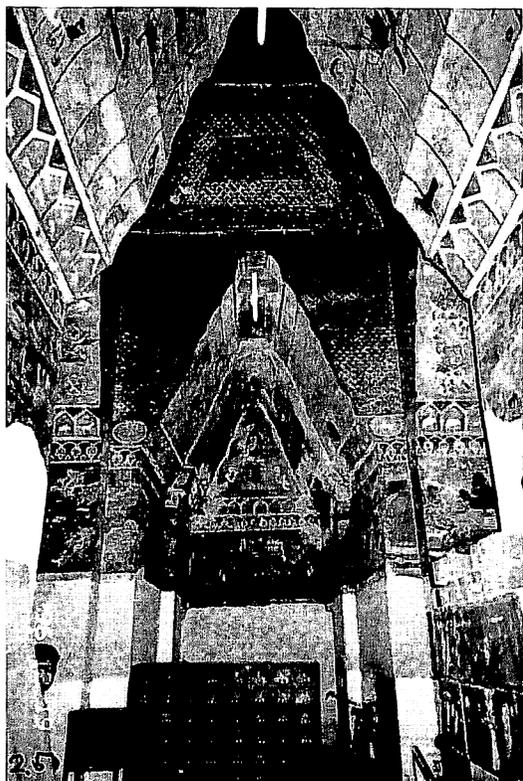


図17 マナムニ・パゴダ (マンダレー) の内部

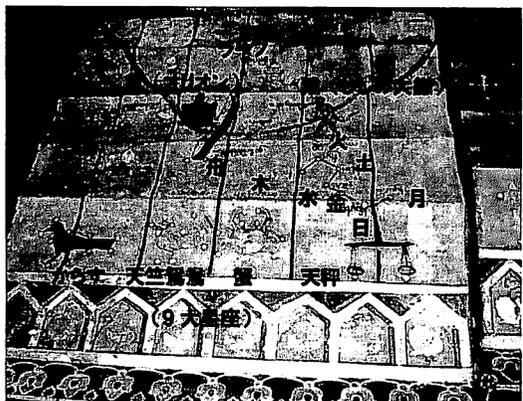


図18 マナムニ・パゴダ (マンダレー) の星座絵

ブツダ博物館 (マンダレー)

マナムニ・パゴダ内に新設されたブツダ博物館にも、内側から9大星座・インドの27星宿・一般の星座が名称付きでシャンデリアのように天井に吊ってあります(図19)。2番目の円の左上には、6匹の雛(プレアデス)から時計回りに、2匹の魚(ヒアデス)、馬の頭(おひつじ座)、亀(オリオン)、舟(ふたご座など)と並んでいます。これは写真家で20年前からビルマ中を飛び廻り、NHKのビルマ各地取材にも大活躍の後藤修身氏からのご通知で、この原画提供者、現物作成者を尋ねたいと思っても手蔓がつかめなかった、とのこと。しかし、現代でも古い星座の信奉者は仏像製作者の裏に隠れているものの、どこかにおられるのは確かです。

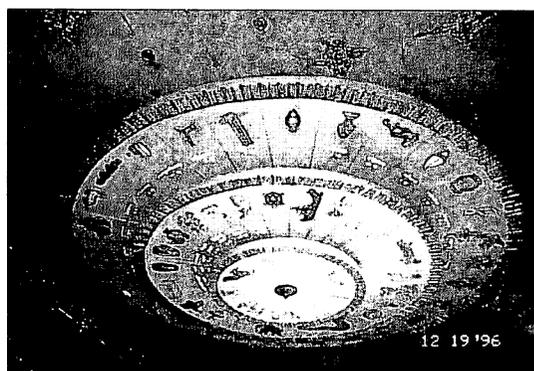


図19 ブツダ博物館 (マンダレー)

シュエズィーゴオン・パゴダ (バガン)

バガンのシュエズィーゴオン・パゴダは現在も信仰の対象となっていて、パゴダは金箔で覆われています。西山氏は境内北西隅の新しい宿坊にも天空図(図20)を見つけています。木造で20世紀に建てられたものだろう、とのことで、吹きさらしになっているので傷んでいます。9大星座、インドの星宿、黄道12星座、ビルマの8方角神のみで、一般星座はありません。また、この絵だけ星が○ではなく、☆で描かれています。

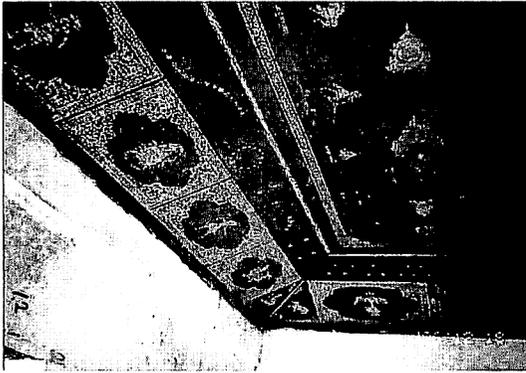


図20 シュエズィーゴオン・パゴダ (バガン)
宿坊天井の星座絵

西山氏は、この他にも次の場所で星座絵を確認しています。

イエザジョー・パゴダ (パコック県)

マンダレーの西北100kmのパコック県にあり、大阪外大の原田正美さんの情報によります。中央の須弥山の背景として9大星座の絵が描かれ、その他の星座は淡い線図で、太陽と月は円盤を載せている山車として描かれています。

パヤ・トンズー・パゴダ寺院 (アマラプラ)

須弥山を描いた周囲に星座がありましたが、1992年に訪れた時には水漏れのせいでフレスコ画が剥落し、見る影もなかった、とのことです。

マンダレーホテル食堂天井 (マンダレー)

150平方メートルくらいの天井が、1平方メートル位に格子状に区切られ、そこに九大星座・黄道十二宮・インドの星宿、ビルマの8方位神とともに一般星座の木彫があります。

マハウィザヤパゴダ (ヤンゴン)

このパゴダは軍事政権の最後であるネ・ウイン将軍が自分の死後のため？に多額の寄付

をして装備一新したと聞くパゴダです。ヤンゴンの有名なシュエダゴン・パゴダの南東角の交差点を隔てた場所にあります。このパゴダ中心の半球状の天井裏に38個の星座が極彩色で描かれ、星は乳白色電球で光らせてあります。チャウトージー・パゴダを模写すると聞いていましたが星座の数も少なく、またプレアデスは「6匹の雛」でなくインド風の「カミソリ」であるなど、シンボルに差異があり、全く同一のものというわけではない、とのことでした。

8. 最後に

西山氏の長年の研究でも、全てが分かったわけではありません。特に、マナムニ・パゴダには多数の星座絵が残されていますが、それぞれは微妙に違っていますので、全ての星座絵の配置を確認して写真を撮ることも、今後の課題です。これらの星座絵には惑星も描かれています、その意味も分かっています。絵の中のビルマ文字が読めればよいのですが、古代ビルマ語を読める人はあまりいないので、まだ十分ではないとのことでした。又、政府の文化担当者を尋ねようとしてもそういう手蔓がありません。

西山氏も筆者もビルマ文字は読めませんので、古代ビルマ文字に堪能な研究者の方との共同研究を希望しています。また、ここで紹介した以外にも、ビルマ国内やその周辺で星座絵が残されているかも知れません。どなたか共同研究をしてもよい、あるいは他の星座絵を知っている、という方がおられましたら、西山氏又は筆者まで連絡してください。

謝辞 西山峰雄氏には、「ビルマの星座」[2]の転載の許可、未発表の資料・写真の提供に加えて、この原稿のチェックまで全面的に協力して頂いたことを感謝します。

参考文献

- [1] 大野徹, 井上隆雄 1980 『ビルマの仏塔』
(世界の聖域・10) 講談社
- [2] 西山峰雄 1991 「ビルマの星座」『星の手帖』53号,27 河出書房新社
後藤修身氏のページ
http://www.ayeyarwady.com/star/star_nishiyama.htm に再掲
- [3] Kelley, D.H., and Milone, E.F. 2004, “Exploring Ancient Skies: An Encyclopedic Survey of Archaeoastronomy”, Springer Verlag
- [4] やまねこランド・ほしはすばる
<http://www.d1.dion.ne.jp/~yamaneco/subaru.html>
- [5] クリックابل!ビルマの星座絵
<http://homepage3.nifty.com/silver-moon/burma/frame.htm>
- [6] 矢野道雄 1986 『密教占星術』 東京美術
- [7] ウィキペディア日本語版
<http://ja.wikipedia.org/wiki/ナクシャトラ>